

ウソと誤解に満ちた「通説」を正す!! 初瀬井路・通水 375年「お初人柱」は如何に

目 次
安 部 茂

1. 二宮壽先生の所見
2. 二宮壽先生よりの意見書
3. youtube に初瀬井路の立て看板と首無し地蔵
4. 大分今昔と初瀬井路物語り
5. 寺子屋時代とクラーク博士
6. 武勲輝千載(ぶくんはせんざいにかがやく)、我が叔父油布武士
7. 下市今昔12号より「お初」
8. 下市今昔12号より「水口觀音」
9. 要約 豊府聞書(元禄年間)
10. 初瀬物語り(曾根崎昭三医師)についての考察
11. 「初瀬のあゆみ」 井元宗氏が寄稿しているようです。
12. 二宮昭二先生を偲んで。
13. 滝吉弘 初代初瀬新井路管理者(廉太郎11歳)
14. 雉城雑誌(天保年間) 初瀬觀音堂 櫟木邑
15. 記録に残る「初瀬井路」
16. 「初瀬井路物語り」の大意としての、もち土手
17. 佐藤万里と玉川上水 玉川喜左衛門
18. 私の祖父安部権平(けんぺい)諸事控帳
あとがき

1. 二宮壽先生の所見

二宮壽先生は、いみじくも、私の寄稿した「挾間史談」6・7号を読んでいただけたのでしょうか。誠に教育者の目線の文章を書いてくれた。私は、伝承の域を出ないであろう僅かな資料でもこれから世間一般に伝えなければならないとの考えに至り、この稿を綴ります。

2. 二宮壽先生よりの意見書

私は子どもの頃、元下市の庄屋の家屋を借りて住み、父が挾間小学校の校長をしていた関係で、訪問した昔を懐かしむ年寄から下市の昔の話をよく聞かされた。初瀬井路についていえば、庄屋の近くにその代官所があり、代官所の名は大正の頃まで残っていた等である。

その時にできた「下市の昔についての关心」から、下市の公民館長になつて八年間、毎月の館報に「下市今昔」を取り上げ百号まで発行した。

その中に初瀬井路のこと書いたが、その資料は昭和四十一年に初瀬井路土地改良区が発行した「初瀬井路史」である。史実にないと責任を問われても、「初瀬井路土地改良区に文句を」という以外はない。そして今私の言いたいことは

(1) 私が求めるものは地区の歴史、一般庶民の歴史である。文献は為政者の記録が主で、庶民の歴史は古老の話「言い伝え」

に頼ることが多い。昔は職業が世襲で文盲でも生活ができる、庶民は文献を書けなかつた。明治の学校制度と就学率の状況

をみれば分かることである。古老の言い伝えを作り話として簡単に消していいものだろうか。

(2) お初人柱については当時の考え方、一つは土地開発と怨靈

の問題、更に江戸時代は武士道の時代、皆のために命を捨てることは美談であつた。それは昭和の神風特攻隊に引き継がれる。私が戦時中受けた戦車攻撃の訓練も命を大事にしなかつた。また飢餓の苦しさ、井路待望の願い等、古老の話には庶民の歴史を探る何かのヒントがある。結局、「初瀬井路」の名前はどうして付いたのでしょうか。

3. youtube に初瀬井路の立て看板と首無し地蔵

壽先生は、「初瀬井路史」に基づいている。文句を言うな

らば「初瀬井路」に言うしかないと記している。「初瀬井路史」を熟読すれば、解るはずです。地区の歴史、一般庶民の歴史であり、古老の話「言い伝え」に頼る事が、多いここに「古老」とは先生の尊敬して余りある。「後藤楳根氏」明治41年生の人ですね。

昔は職業が、世襲であり文盲でも生活が出来庶民は、文献を書けなかつた。明治の学校制度と就学率の状況を見れば解る事である。

古老の言い伝えを作り話として簡単に消して良い物であろう

かと結んでいます。教育者らしからぬ事を語つてゐるようである。

一例をあげれば明治初年滋賀県は、中江藤樹、「近江聖人」慶長3年生まれ、人の道、知行合一、身分平等や四書五経を説き、熊沢蕃山、山田方谷等を輩出する。41歳で没する。

滋賀県は近江商人を生んだ地域です。就学率は男子95%女子85%の識字率でした。

先生は下市八坂神社の前にもう何年か前から立つてゐる。「初瀬井路」の説明板、ここを通る人々は、(ウソを)書いているが、信用して読んでいる。悲しいことです。お初人柱は、当時の考え方、一つは土地開発と怨靈の問題、更に江戸時代は武士道の時代、皆の為に“命”を捨てる事は美談であつた。それは昭和の神風

特攻隊に引き

繼がれる。私

が戦時中、受

けた戦車攻撃

も“命”を大

事にしなかつ

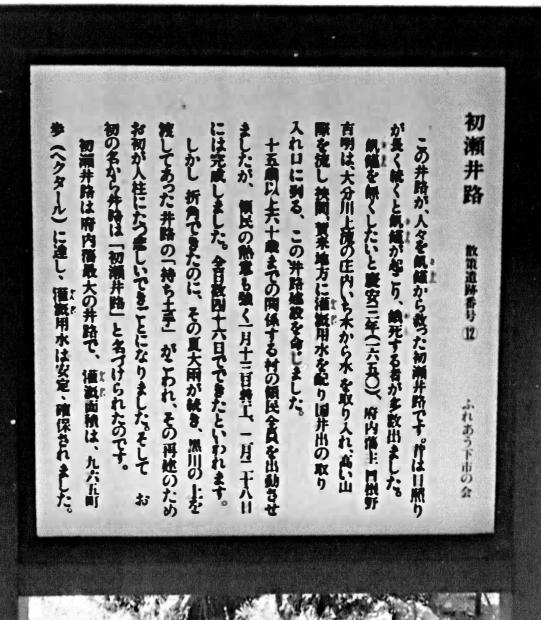
た。また飢餓

の苦しさ、井

路待望の願い

等、古老の話

には庶民の歴



史を探るヒントがある。結局のところ「初瀬井路の名前は」どうして付いたのでしょうか。それをいうならば、僅かな年次であるが「初瀬井路土地改良区」の工務係として勤務して農業者に豊穣を約束する事は「初瀬井路土地改良区」職員の与えられた尊厳であり、誇りとする所であります。youtubeに、「お初人柱」として8か月前に新しい1分22秒程の長さであります。ふれあう下市の会が作製した立て看板。通る人が（嘘）読む。不気味な姿の首無し地蔵を写している。「やせうま」も1年前に、挿間町でなく大分市吉野の伝説。吉野発祥を止めて。「名産 物 特産 本場」としたらどうでしょうか？長野県が起源です。

4. 大分今昔と初瀬井路物語り

人柱は、大分県内では昭和35年に日出賜谷城の裏鬼門（うらきもん）の位置で座つたままの遺骨が出たと報道された。それを踏まえてと思われるかもしれないが、昭和38年10月27日だろうと思いますが、大分合同新聞夕刊コラム「大分今昔」に、「初瀬残酷物語り」が、掲載されたようである。当時映画、東映で「武士道残酷物語」今井正監督 中村錦之助主演 38年4月2日公開のオムニバス形式の映画です。そのコラムニストに情報提供したのは何処の人であるや。

5. 寺子屋時代とクラーク博士

昔は職業が、世襲であり、文盲でも生活出来た。故に先生は教

師むべなるかな。現在、NHKで放送中の「大河ドラマべらぼう」でも分かるが、あの時代に曲亭馬琴の「南総里見八犬伝」、十辺舍一九の「東海道中膝栗毛」等多くの人達が、読んでいた。先生は文盲でも生活出来たと書いているが、大体の人が、7歳～13歳位迄、寺子屋で、学問をしていた。全国で1万5千あつたそうです。江戸時代後期は就学率80%です。「読み書きそろばん」、「四則演算」、等教科書としては「庭訓往来（ていきんおうらい）」、「商売往来」、「農業往来」等御家流と言われる。幕府の決まつた書体を使用していた。文盲と見える文章が見えるのは泉鏡花の「滝の白糸」、の水芸人が恋人に宛てた手紙を他人に書いてもらう下りがある。これくらいのものである。NHKドラマ「あきない世傳（せいいでん）、金と銀」女中から跡取りの嫁となる時に商売往来を譜（そら）んじる。明治7年海軍兵部寮（後の海軍兵学校）ができる。明治9年北海道に札幌農学校開校しクラーク博士が僅かに、8ヶ月であつたが初代校長として赴任 新渡戸稻造 内村鑑三 大島正健 宮部金吾 伊藤一隆 伊藤はタレンントの中川翔子の曾祖父であり、カナダへ渡り現在の鮭の鱻（ふ化）事業を発展させたひとです。

明治26年（1894年）に、日清戦争に勝利するが維新より近代化を目指しました。二宮先生文盲が多くいたならば、日清戦争 日露戦争の勝利は無かつたでしょう。

6. 武勲輝千載（ぶくんはせんざいにかがやく）、我が叔父油布武士

これは私の叔父、油布武士の掛軸であり、農協倉庫上の城畠共同墓地昭和12年11月10日21歳にて戦死する。祖母の生まれは上市で海老毛地区に1番近い元区長後藤さんの家です。「お初人柱」の場所とはすぐ近くですが、祖母、母から共に人柱の話は、聞いた事は無い。叔父 油布武士墓標には、皇紀二千六百年正

月二日 長谷川部隊末永隊陸軍少尉吉岡繁雄氏が墓標の文撰と掛軸を軸装して下さる。

君は資性温順にして時に孝心厚く、事に従い熱心真摯なり。

昭和12年1月10日現役兵として歩兵第47連隊に入隊爾来（じらい）、小官の教示下にありて成績優秀なり。偶（そもそも）曰支

事変勃発するや、長谷川部隊に属して勇躍。北支永定河渡河戦始めて進む疎定（よてい）に転戦、君は傷を纏（まと）う所勇名伴い倒れる事なし更に一転中支杭州湾に上陸、陸上包囲して隨所に積敵を撃破、十一月九日夜より十日払暁（ふつきょう）三県山文台下、隘（あい）路に於いて海開道付近、残走する我に、十数倍の敵と、終夜、白兵戦を開戦するも、君は卒先、先頭に立ち群敵中に、抜刀必勝確信の白兵を奮う激戦七合の時、不幸數弾受け壮烈なる最後を、遂に嗚呼可惜君（ああ惜しむべき君）の肉体は、遂に江南の地に、散華（さんげ）せり。然（しか）れども、君が最後の瞬間まで凄絶無比粉戦乱闘の渦中再りて、哀よ

く國軍独特的の白兵の優越を奮い憤然敵に赴き、小隊志氣の中樞となり奮戦せる姿は今尚我が眼底に新たなる所のみならず、永く陣中の美談として國軍昭和戦史に燐たるべき況や（いわんや）興亜の礎として、神座に列し永く後昆の範となし尊崇せらるるに於いておや君を以（もつ）て、瞑（めい）すべきなり。

皇紀二千六百年正月二日

長谷川部隊 末永隊 第三小隊長

陸軍歩兵少尉 正八位 勲八等 吉岡繁雄

小学校時代は八箇年間それに青年学校品行方正、学力優等にて卒業模範青年として、賞揚せらる。

昭和十年十一月十五日大分郡青年学校代表として、天皇陛下の御親謁に浴す。

もう40年前位であろうか、挾間大橋北側の即願寺の近所で仕事をしている時に叔父と同級生と言う人につた。私が甥だと言つたら、戦死しなければ地元の為になつていただろうと言われた時は少し、誇らしく思つた。



7. 下市今昔12号より「お初」

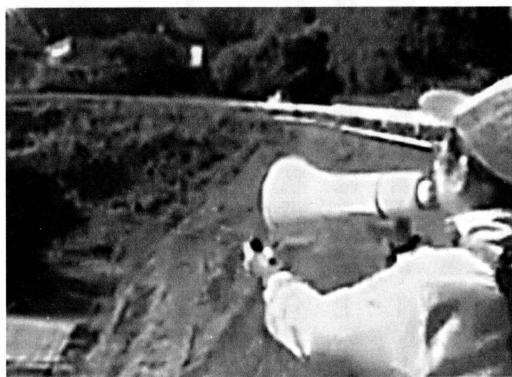
二宮先生が「下市今昔」、12号 挾間、賀来の人々を飢饉から救つた初瀬井路トンネルの東側と言う文章を寄稿しているので、この文より引用する。

人柱に立つたお初の名をとつて「初瀬井路」

領民の熱意で初瀬井路は46日で出来たのですが、その年の夏に大雨が降り黒川の上を渡して井路を支える持ち土手が流され、その後何度も作つても、また大雨で流される事が続きました。この土地には怨霊がいるという事になり、お初が人柱に立つ事になりました。縦縞の着物に横縞の縫い布をあてた（川の流れを渡るの意）着物を着せられて人柱に立ちました。失敗してはおらずました。そして無事に工事が完成。その後300年、事故は全然無かつたそうです。このお初の名を取つて井路は初瀬井路と名がつけられました。

以上 下市今昔を忠実に

引用させてもらいました。



疑問点を述べる

先生が教育者である事は周知の通りです。375年前に生きている、自分の教え子と同じ位の生きながら土中に埋められた言う話を、自慢話の如く「お初人柱」として喧伝している。「初瀬井路史」には、盛土高が30mとある。これは県庁の高さです。私が測量したら、黒川水面より水路天端迄13mでした。黒川右岸（大字向原字土手）に幅4m高さ4m程度軟岩層約12mを掘りぬいてある。盛土は左岸であるが youtube で吉田洋子さんが大変な盛土とマイクでいつている。隧道の上では約7mであり、水路を掘るには残土の処理場所として「持ち土手」が形成されたのだろう。「挟間町史」244ページへの下段に鑰小野井路（世利川井路）で工藤三助翁は岩切貰帳場、岩堀割帳場、土立て掘別け丁場、持塘（もちつつみ）丁場樋（とい）を掛ける工区。つまりこの（もち土手）とは土を盛るのではなく掛樋で渡す。土木的な考え方からすれば、黒川は元々柏野川であり埴坪を水源とした延長川幅も、狭い川です。さほど勾配もきつくなれば所々に堰を作れば緩勾配となる。字（あざ）土手に大きなトンネルを開けているので、故にお初は必要なし。

8. 下市今昔12号より「水口觀音」

お初の事件でも分かるように、初瀬井路は簡単に出来たのではないようで他にも悲しい言い伝えがあります。樺木（いちぎ）の水の取り入れ口の少し下流にある觀音渕の上、国道210号

線の道端にいくつかの石像が立っています。この石像は水口観音と言われていますが、これは日根野織部正吉明公が、清水与兵衛の靈を弔つて立てたと言うことです。江戸時代の書「雉城雑誌」に、初瀬井路の開通の時、水を流したところ水はあちこちで停滞して流れなかつたそうです。日根野吉明公は怒り嘆きました。そして清水与兵衛も粉骨碎身、1点の私意なく全身全靈を打ち込んでやつたのに相済まぬと切腹神仏はこの英士の赤心に、打たれたのか、水が滔々と流れ始めたと言うのです。しかし清水与兵衛はその後も生きていた記録があるそうで、この水口観音は初瀬井路開発の中で、いろいろの苦労があつた事を物語るものであろうと言われています。

以上、下市今昔は完全コピーであります。

私は、先生がどこからニュースソースは如何なる所より仕入れたのか、知らないが表題の如く「誤解」、即ち誤った解釈と断じる事を証明しよう。

挿間史談6号、49ページに「日根野織部正吉明公いよいよ初瀬川に着手」、(豊府聞書) 詳細は後述の資料を参照されたい。

9. 要約 豊府聞書（元禄年間）

要 約

国井手の水口が小さくこれは賀來、荏隈の2郷庄のみの為であり、笠和郷中迄至らずそのため吉明公は大井手の開削を企て

た。春耕夏耕旱魃の時に水を求める。我、これを憐れみて、故に挿間より東院河に合流して民人の辛苦を救わんと欲つす。長臣等、大いにこれを称する。下士清水与兵衛9石、大山助左衛門12石を召して新井手の慮を示す。府城に帰りて、謹んで曰（いわ）く水口、挿間より東院河に至る両水合して急流をなす。その流水速かに笠和郷中より生石名に充満する事、疑うべからず。水口より、東院村に及び新田多く興らんと。城主これを聞き大いに喜び即ち領内の民人15歳以上60歳以下、明春挿間井手を成さんと。慶安3年正月上旬清水与兵衛、大山助左衛門、城主の命を受け挿間に到り領内の名主に諸人を招くを命ず、是に於いて民黎挿間に聚る同月13卯日清水、大山両氏、諸民をして新井手の事を興す。此の時に到り群民各々励み力を強めて山を鑿（けず）り、谷を堀（しろつち）し或いは巖壁を掘り抜き、水を流通し其の大功を挙げて計うべからず。城主縷々彼の地に到り諸民の大功を勞（ねぎろ）うて府城へ帰る。同年2月28日新井手の功遍（あまねく）成る。此到りて、水洋洋と流通して、曰く我蛇口、柿原井手を成し。今まで此の井手を興すに数月を歴ずして速かに成る即ち石師をして観音の映像を。次いで『初瀬河』

長宝水、永宝水並びに城主の自名及び清水、大山両氏の名を岸壁に彫り付けしめて以（もって）井手の成るのを証となす。また諸氏及び領内の名主等と酒を汲み、井手を賀して日（いわ）く

幾久し吉明（よしあけ） られき初瀬川 流れをうけて民も榮へん

然して府主城へ帰る。因て諸民旧里へ還る。清水、大山両氏、府城に入り城主に謁見す。時に吉明これを勞（ねぎら）い、その町間及び人夫の数を問う。清水、答えて曰く、水口觀音より東院川に至る、139町55間余、夫員93,202人なり。

正月13日井手の事始め、2月28日その功終わる。日数合わせて46日に成るなりと城主清水、大山両氏および諸民の大功を感じ。黎民の府主の仁徳を称す。清水与兵衛の後裔たるハツ氏の旧記には概ね右記の通りの数量である。臼杵藩との取決め書類には「日根野織部正内・大山助左衛門・清水与兵衛・下市村・善左衛門・上市村久兵衛慶安3年寅月3日しかし清水家文書には3月26日初瀬川水揚出来即日死去とある。（大山助左衛門12石、清水与兵衛9石）なお、天保年間の「雉城雑誌」には初瀬観音堂としての記述がある。別紙に原文と私の口語訳を参照されたい。

10. 初瀬物語り（曾根崎昭三医師）についての考察

全て初瀬井路に於ける錯覚は昭和38年に井元宗氏が土地改良区に徵収係として入所、「初瀬井路史」や、「かしわの区史」、「挟間町町史」、に（お初の哀話）を寄稿している様です。二宮先生には、辛辣とも言える言葉を述べたが、本当に375年前に地

区の責任者が協議したり、ありもしない妙蓮寺、陰陽師は、綱吉の時代、天和3（1684）年で、土御門家は若狭の国へ行く、故に古人（いにしえびと）曾根崎昭三医師の「初瀬物語り」、表紙には、お初が人柱になつた黒川の持ち土手の写真がある。この本は初瀬井路史、かしわの区史、古人、大分今昔等シャツフルして書いたのでしよう。社民党公認で2010年の参議院選挙で、落選した松本文六氏、天心堂へつぎ病院理事長のプロパガンダであろう。2007年に発刊、大筋として挟間井手であるのに医師が、阿南小学校、阿南郵便局等があるので阿南庄新井手として、開削するが文六の孫「お初」を持ち土手に陰陽師が結界を結び大勢の僧侶が読經する。お初は徐々に埋められ、「お初の穴」は塞がれた。

『初瀬物語り』この本は何を調査して書いたのであろうか。

随所に間違いがあります 大分県立図書館豊の国情報ライブラリー初瀬井路の「お初」の伝承について小学生の一団が調べに来ました。初瀬井路は、挟間町からその下流域、大分市の田畠へ水を供給する水路の「お初」と言う名前は、井路を作る時に人柱となつた「お初」と言う名前に因んだものとと言われています。初瀬井路史には、ほぼ伝承としています。金池小学校創立100周年記念誌には、校区の古老の話として、詳細な伝承が記述されます。金池小学校には、井元氏が説明したのだろうか、金池町には、田圃は無い。「お初の涙が水を呼ぶ」を喜んで写して帰つて行きました。子供達が郷土の歴史を調べる際の参

考になればと言う著作者の思いの籠る労作です。と記しているが、全く間違いが多くあります。

11. 「初瀬のあゆみ」 井元宗氏が寄稿しているようです。

(土地改良区より永年配布されていた)

初瀬井路は、大分県内でも古い歴史を持つ井路であり、大分川左岸 1000 ha を灌漑していた。現在の幹線は 3 回にわたつて開削されている。その第 1 は（国井手）として、大分市宮苑より賀来、荏隈の 2 郷庄であり、時は豊後の南蛮貿易で有名な大友宗麟の子義統の時代で、今から 405 年前、織田信長が暗殺された（本能寺の変）の翌年、天正 11 年（1583）である。当時のかんがい面積 600 ha 位あつたと思われるが、この水系地区は現在、大分市の中心部属し、市街化と成りつつある。

※ 国井手の開削について「被調第一」、「急度成就」、大友吉統はあるは天正 16 年であり、庄内町史では開削は天正 17 年となつてている。ここでも、土地改良区として、間違つてている。この文章は 1988 年（昭和 63 年）それまでは手書きの「初瀬のあゆみ」であつたが、ワープロで書き込んでいます。井元氏は昭和元年生まれなので文章は 20 年以上年次、数字を單に変えただけでした。

次に現在の初瀬と言う名称となつている。「初瀬川」として、開削された井路は庄内町榛木より挾間町を通つて、前記宮苑に合

する賀来川向かいの東院に至るまでの間、延長 16 km、かんがい面積 400 ha 位である。この開削について、いろいろの文献や、伝説も残つてゐるが、概要を記すれば、今から 338 年前の慶安 3 年（1650 年）の春、時の府内城主日根野吉明公は旱魃に辛苦する民を憐れみて、井路開削、を考え家臣の清水与兵衛九石、大山助左衛門十二石に命ずる。

この開削にあらしめた 2 人は、領内の民人 15 歳以上 60 歳以下、の者に出役を命じ完成までに延べ 93,302 人、延 139 町 56 間とあるが、尚、驚くことは、これに要した日数が僅かに 46 日間とある。各地区別にそれぞれ請負区域が割当られて必死の競争が展開されたのか。今日では想像する他ない。これも 1 度で完通成功したとは書かれていないようだ。危険箇所あり、欠潰箇所続出、真の完成までには文字通り血のにじむ多くの労苦が重ねられてきたことだろう。

初瀬と言う名のおこりについても、種々取り沙汰されてゐるが、古者の言によればこの井路の途中、向原字中村と挾間字上市の間に、大分川の支流で黒川と言う谷川がある。この上に井路を通さなくてはならぬ地形があり、ここが



一番の、難工事であつたと思われる。土をもつて土手を築けど欠潰し、ついに人柱を立てて、この完成を願つた。伝説によればその人選に種々協議の末、もし縦縞の着物に横縞のふせ（つくり）布を当てている着物を着てゐる娘がいたら、その娘を人柱に選ぶと言う事に決まつた。早速探していたら、たまたまお初と言う娘が、その様な着物を着ており井路完成の為に神様に捧げる人柱とされたと言う。以後、欠潰をくり返していた。

この土手も收まり水が、井路に満ち満ちて流れるようになつた由、この犠牲者の名を取つて「初瀬川」と名付けられたと言う。それ以後、この土手の手前中村地区と上市地区の人々はお初の靈を慰めるため、毎年お盆に欠かさずお施餓鬼供養を続けて來たという事です。また、井路完成の証として、城主が櫟木の取り入れ口付近の大分川の左岸に観音の影像を彫らしめてあつた由。この観音像も永年の風水害の為に崩れ落ちて判明し難いが、付近の長老は、凡そのあつた場所を伝え聞いているとのことです。

現在、上流にダムが、出来て川の様相は昔と変わつてゐるが、観音渕と言う名は今も残つてゐる。この取り入れ口より約1kmの間は大正二年に開削しほんどの隧道で、この掘削に要した労苦は並大抵のことではなかつたであろう。幅2m高さ2mで、現存する素掘りの跡形に往時が偲ばれて感無量である。ずっと後になつて3つ目の井路が出来てゐる。これは挾間町向原より前記初瀬川の末流、東院までの間で、7kmであり、上を流れる初瀬川の漏水をも受け入れて一滴たりとも無駄にせぬように下流に

流すためでためです。これを補水線と言い今から294年前の元禄7年（1694年）の掘削で、時の城主は松平対馬守昭重である。以後この3線を併せて初瀬井路と呼ぶようになった。

管理者は、城主より郡長、町長、市長、そして現在の土地改良区理事長と受け継がれている。

12. 二宮昭二先生を偲んで。

昭和38年に「大分今昔」に『初瀬残酷物語』が、掲載されました。二宮昭二先生が、いわゆる（持ち土手）のすぐ近くに住んでいました。当時先生は賀来中学校（全校9クラス）の9人制女子バレーボールの監督でした。王子中学校（全校54クラス）等を破り、決勝は国見町の熊毛中学校に勝利して、優勝しました。昭二先生は平成8年に、井元氏よりの地域の資料を含んだ本を著している。

ここに結論を述べる

井元氏が、【お初】に、関する事を書く前に持ち土手のトンネルを見ていれば、【お初】を想像しなかつたであろう。全て作り話です。#15 閑話休題を読んでいただければ、解るでしょう。「新井手の事を興す。此の時に到り群民各々励み力を強めて、山を鑿（けず）り、谷を壘（しろつち）し或いは巖壁（いわのつば）を掘り抜き、水を流通し其の大功を挙げて計うべからず。」どこに【お初】の入る余地があるであろうか。

13. 滝吉弘 初代初瀬新井路管理者（廉太郎11歳）

明治21年4月17日制定された、府県市町村制度となる。明治19年富山県会計第二部長（副知事相当）であつた。滝吉弘（廉太郎父）が明治22年3月14日内務卿山県有朋より非職を命ぜられ、同年4月5日付けにて内閣總理大臣黒田清隆により大分郡長となる。明治23年6月「普通水利組合条例發布」、となり初代初瀬新井路水路組合管理者となつた。しかしながら明治24年11月27日付にて、任直入郡長（廉太郎11歳）を内務大臣、品川弥二郎より。

下市の初瀬井路の説明板に965haと書いている。明治23年6月である。

昭和34年(1959)720ha

昭和46年(1971)550ha 組合員1,290人

令和7年(2025)210ha 組合員740人である。

10年前yūt yubuに初瀬井路ボランティアガイド「お初人柱」、また同じく、10年前「歴史⑯近世の大分く江戸時代IV農地開発と産業の発達」で当時の先哲資料館館長、佐藤見弘氏が初瀬井路はお初人柱の供養の為に名前を付けたと語つていて。必要があつたのだろうか。私は茨城県で仕事をした時に一人で

100haを耕作現在農事法人であり、又、一年後輩に宮城県栗原市の豪農出身が毎日10人～15人の世話をしていたと母親の日記を見させてくれた事があつた。宮城県ササニシキ、秋田県あきたこまち、新潟コシヒカリ、此の地域には、【人柱】陰陽師はないであろう。

14. 雉城雑誌（天保年間）初瀬觀音堂 機木邑

同村田吹山下、櫟木川ノ岸、壁中二一小堂アリ。真実ハ觀音かんのん大士ナラズ。慶安中、日根野吉明、封内ノ水田井堰ノ用二、此川ヲ堰留メ嶮山ハ洞穴ヲ穿チ、平地ハ溝渠ヲ通ズ。府城ノ西部ニ至テハ、其ノ屈曲十有余里程ニ及ブ。実ニ稀世きせいノ一大業也。家主清水与兵衛九石、大山助左衛門ヲシテ、其そノ事ヲ司シム。落成ノ日ニ臨ンデ此ノ川水ヲ決マリ通ゼシム。日根野氏モ促駕シテ來臨ス。土地ノ高低一ナラズ。通水ノ利害、群議潮ぐんぎうしおノ如クニ湧ク。日根野氏大キニ怒リテ二土ノ其職ニ幹タラザルヲ責メ、且ツ其ノ持ツ所ノ手槍ヲ取りテ床几ニ掛リ、川水ヲ臨ンデ嘆息シテ曰ク、抑モ大業ヲ起スノハ、封内蒼生ふうないそうせいノ為ニシテ、吾レ戰國せんごく二生レ、攻城野戦こうじょうやせん、一ツモ汚名ヲ取ラズ。其ノ武功ヲ以ツテ忝ナク當国ニ封ゼラレル。今ヤ七十歳ニナシなんなんトシテ此事成ラズンバ、何ノ面目アリテ力隣国りんごくノ諸侯しょごうニ面ヲ合ワセン。此ノ一挙ニ吾ガ生死ヲ委ネンノミ。時ニ通水案つうすいあんノ如ク所々停滞どころどろてい必不可必不可つた

セシカバ、清水氏天ヲ仰イデ歎ジテ曰ク、吾ハ此ノ職ヲ奉
ジテヨリ、朝練夕磨、粉骨碎身シテ一点ノ私意ナント雖モ、

龍王河伯、

通水ヲ欲セザルカ、唯主君、

封内ノ蒼生安全ヲ

慮ル所ニシテ、カヅル大業発起ス。若シヤ上天ノ神明

仏陀、臣ガ赤心ヲ憐ミ玉ハバ、速力ニ水利ヲ成シ、蒼生ヲ

シテ長ク安穏ナラシメ、且ツ主君ノ怒リヲ緩メ玉ヘト、云

イ終リテ自裁ス。カカリシカバ神仏何ゾカカル英士ヲ感応

ナカラニヤ。不思議ナル哉、停滞セル水、忽チニ怒涛漲

り来テ、土石ヲ穿チ砂泥ヲ巻キ、通水滔々タリ。是ヲ以テ、

封内ノ民、早魃ノ患ヲ除キ、汲水ノ苦ミヲ省ク。今ニ至リ

テ其ノ徳沢誰力是ヲ仰ガザランヤ。即チ件ノ觀世音ハ此

ノ清水氏ノ靈ヲ祭リテ、仏家ニ水相観ノ事アルヲ、以テ、

日根野氏浮屠ノ輩ト謀リテ、此ノ堂ヲ創立ス（中略）此外、

所々井手明神ト云フモノアリ。皆清水氏を祭ル（下略）

しかし元禄に成る「豊府聞書」には、既記の如く清水与

兵衛は帰城して、日根野吉明より、その大功を感謝され

たとある。また前引の四月二日附白杵領との交換文書にも

与兵衛の署名があるし、さらに没日を三月二十六日として

いる等より見て暇令等何かの理由で自裁したとしても、そ

れは初瀬川竣工の日であつたとは認め難いのである。因み

に「豊府聞書」元禄年間、「雉城雑誌」天保年間 時系列的

には 千七百年と千八百五十年と百五十年の差がある。

いずれにしても清水与兵衛、大山助左衛門の両氏は吉明

公の円寿寺日根野公の廟堂に3人揃っています。これでも、「お初」を申し上げますでしょうか？

15. 記録に残る「初瀬井路」

① 豊府聞書元禄年間（1688～1703）「山を鑿（けず）り谷を堀（しろつち）し」

② 大石家文書宝永7年（1707）「夫員数93,202人は91,202人とある」人員や米支給等詳細に記録あり

③ 雉城雑誌天保年間（1830～1846）「初瀬觀音堂櫟木邑」

④ 初代県令・森下景瑞（かげなお）明治8年（1876）

井路改称取締方の儀につき願書

今般初瀬、宮苑両井路合併、一条として初瀬井路と惣称、春修繕はもちろん急破の節も同一に看護し、一条の名儀不背様、是一に賦課し毫（ごう）も私無きを要す。

#-7にて、前記「初瀬井路物語り」、此の本は大分県立図書館・豊の国ライブラリーには、初瀬井路の『お初伝承について』の文章があります。【初瀬井路物語り】は「お初」一族の話を軸として、時代背景や農民の暮らしの様子も分かりやすく解説しています。95ページカラー刷りです。

16. 「初瀬井路物語り」の大意としての、もち上手

阿南庄新井手が、「お初」と言う名前の娘を陰陽師により、そして地元の世話人の力により人柱となりました。国井手と總称

して【お初】の名前を取つて【初瀬井路】と呼ぶ様に成つたと、医師は記しています。本当にどうか。何度も土手が流されたと井元氏・曾根崎昭三医師、二宮壽先生達は現地を見たのだろうか、何度も流されたのなら上の中の「お初」の死体も土石流と共に流されたかもしれません。初瀬あゆみにはお施餓鬼供養したとあるが持ち土手近所の人々に聞いたが何年もいるがそんなことは見たことも聞いた事もないそうです。

私は何度も述べるが、土木技術者です。黒川の濫（らん）しよう（水源）は茅場の下、東行の埴坪（はねつば）です。流量とは流出係数 × 面積であり、自然林等ありどれほどの水が、緩勾配であり大きな隧道もあります。持土手より下流は急流を呈している後に元治水井路が、挟間村茅場を経て黒川に谷流しされた井水は海老毛村堰上げを経て来鉢丸田→赤野→黒野→野田→中尾堤迄到る。柏野分水線として、大水の時放流する。これは佐藤万里によつて元治元年（1864）です。水路は灌漑期と非灌漑期があるので充分に維持管理・手当ができる。375年前で46日間の何日目に埋められたのでしょうか、水が井路に満ち満ちて流れるようになつたと井元氏は記している。奉行の両氏は水路通水の日までに幾度も試験通水を経て日根野氏を龍ヶ鼻（古国府、元町境）に促駕（そくが）して来臨す。高低一つならず、通水の利害とあるが各荒手（放水門）、はY字形を呈しており、つまり急破の時に水を上下流を放流する。私はどの辺りまで湛水（たんすい）をしてこの日待つたであろうかとも思う。

17. 佐藤万里と玉川上水 玉川喜左衛門

慶安2年より4年間かけて玉川上水を家光の命により地理学、水利学的見地を駆使して、農業用水、清潔な水を供給する水道の建設、延長43kmに及び完成したのは玉川喜左衛門です。因みに太宰治が自殺した玉川上水の川幅は10mです。大変な難工事であり、犠牲者も出たと言われています。彼の人格者故に地元交渉等ができたのです。初瀬井路の開削に尽力した。清水与兵衛、大山助左衛門にも通ずるものがあると思いを深くするものです。最後に結びとして天才科学者

アインシュタインは語る、その言葉を記そう。

悪い者が国を滅ぼすのではない・それを見て見ぬふりをする人達が国を滅ぼす

是にて、【初瀬河】は日根野織部正吉明公が名付けられた事に間違いない。

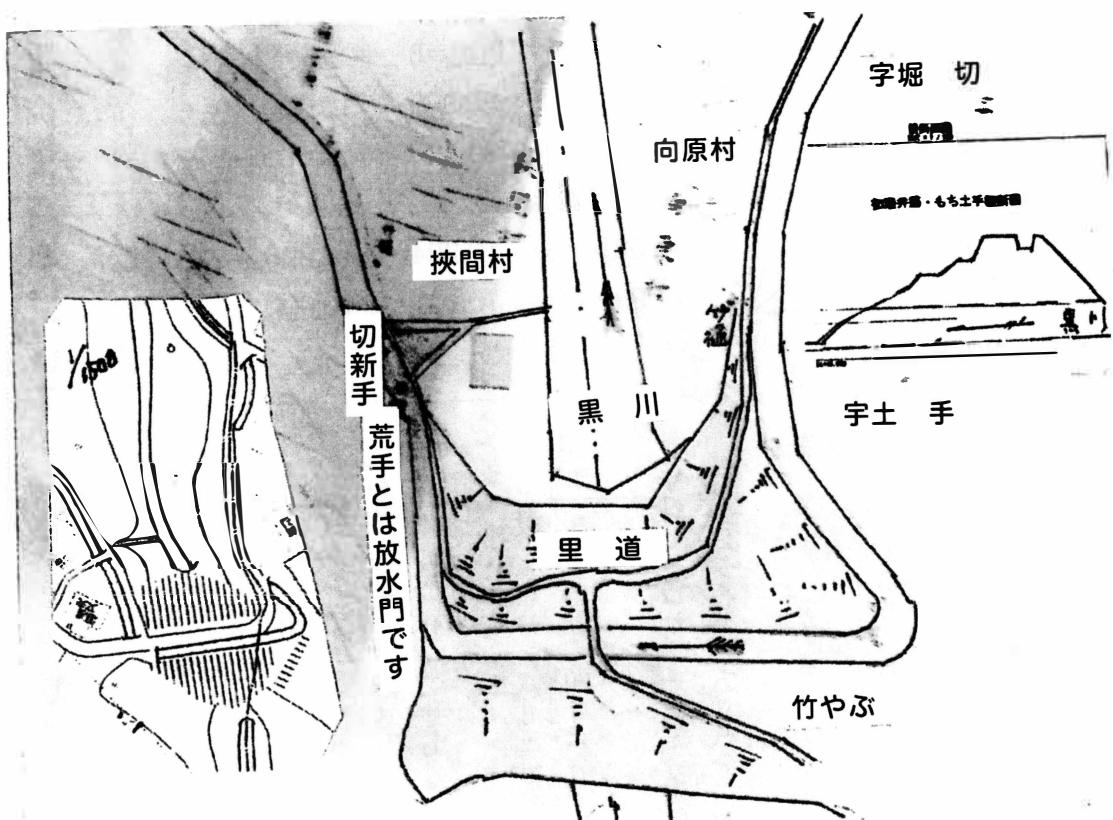
④観音淵と取水堰 明治21年

④ 観音淵と取水堰 明治21年測量



⑤もち土手

⑤ もち土手 明治21年測量



18. 私の祖父安部権平(けんぺい)諸事控帳

諸事控帳の検索について

祖父の書付けは、使い方としては

面積計算

升法

生 慶應2年	1867年
没 昭和24年	1949年
82歳	

表紙 明治26年 旧10月19日

諸事控帳

裏表紙 大分縣豊後國大分郡賀来村大字国分405番地

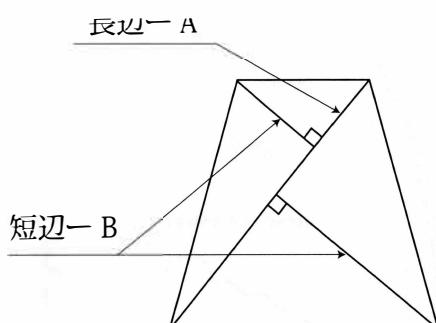
麻生権平所有 持主

祖父の職業

祖父は30歳前後に、安部家に養子となつたようである。高祖父、曾祖父共に養子である。屋号は「今津留」であります。故に我が家は下ん屋敷です。

代々村会議員、学務、農地、水利委員、社寺総代長等歴任と

墓碑に、無歴撰、母家の伯父は、町会議員、市会議員、初瀬井路理事、理事長、農協理事等役員を40年近く続け、元町の「蓮華の杜」完成後引退後わが中尾より代表理事 現、初瀬井路理事長は、私とふたいとこにあたる人です。祖父は、後述するが、滝吉弘の部下として測量図等の技術者であったようである。中尾の井野辺病院の近くに、令和4年度県営圃場整備工場として9ヘクタールの土地に、清川村にて稼働中の菊栽培園地。(有)お花屋さん「ぶんご清川」として6,000坪9棟にて菊栽培園地建物2.1ha、年間270万本を栽培、全国に発送との事である。



測量必携かもしれません。

長辺一 A に対して短辺一 B の
比率を掛ければ面積計算ができる

長辺一 A	短辺=B	平方メートル
11×	90.909	10,000
12×	83.333	10,000
98×	10.204	10,000
99×	10.101	10,000

十升	5升	壱升	一合	ヒロサ	二寸一分一厘
フカサ	ヒロサ	ヒロサ	ヒロサ	フカサ	一寸一分五厘
五寸八分二厘二毛	八寸三分七厘八毛	四寸六分一厘六毛	四寸五分	二寸七分	
一尺五分六厘三毛					

惣反別田畠林・総計

明治式拾三年・水利（灌漑）面積

国分村内
惣迎金 四万四千五百三拾三円六拾二錢
地租金 千百三拾円六拾八錢壹厘

一百拾五町七反一畝十八歩
四万四千五百三拾三円六拾二錢
千百三拾円六拾八錢壹厘

当時の水利（灌漑）面積

山林反別総合計記 拾町六反四畝四歩

地代償金 弐百三拾弌円四拾錢

地租金 五円八拾七錢

宅地反別総合計記

六町零反五畝拾三歩

地代償金 金千八百四拾三円七拾三円七拾九錢

地租金 五拾五円二拾六錢弌厘

下反別計記 三拾弌町零反九畝弌拾四歩

上反別計記 四拾五町三反六畝拾四歩

上下田反別計記 七拾七町四反六畝八歩

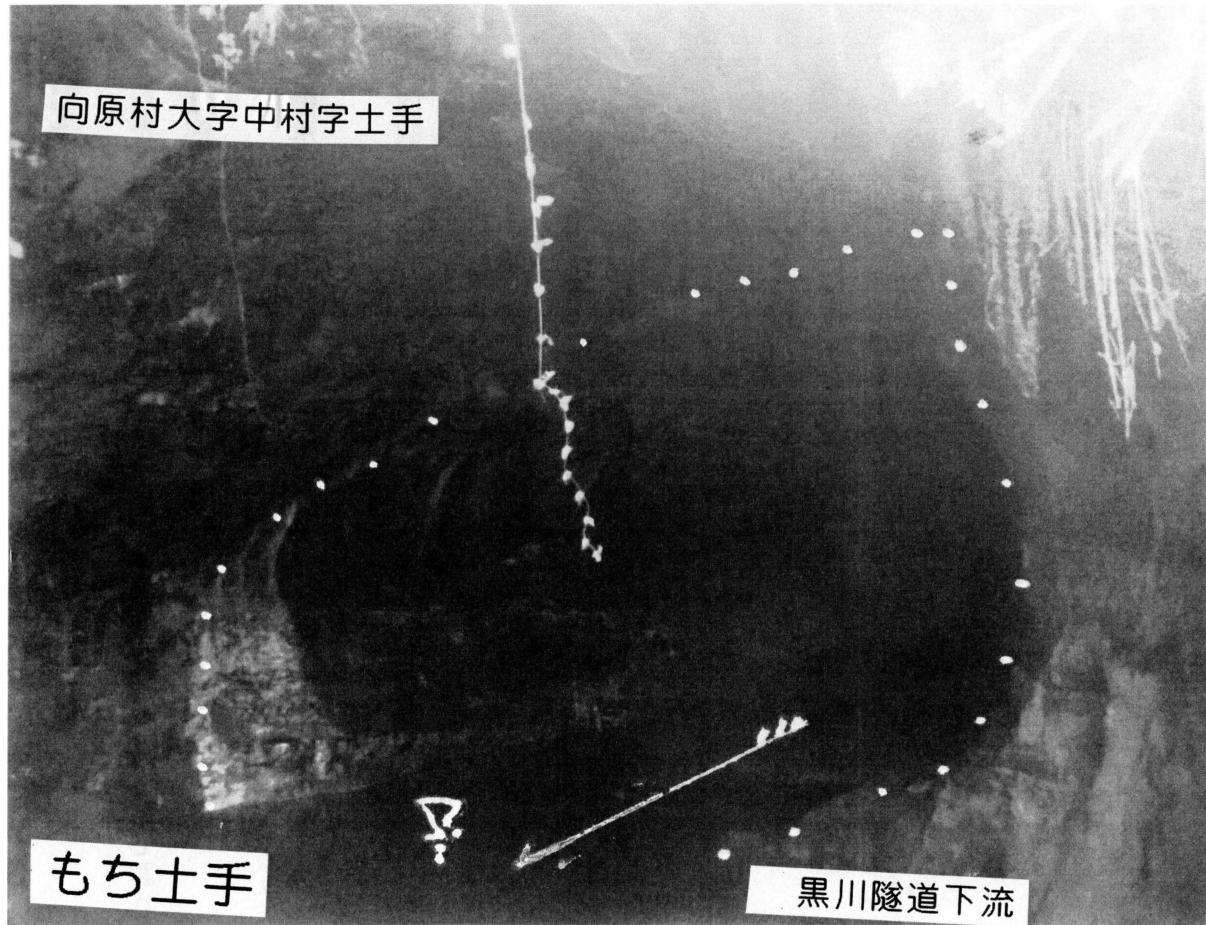
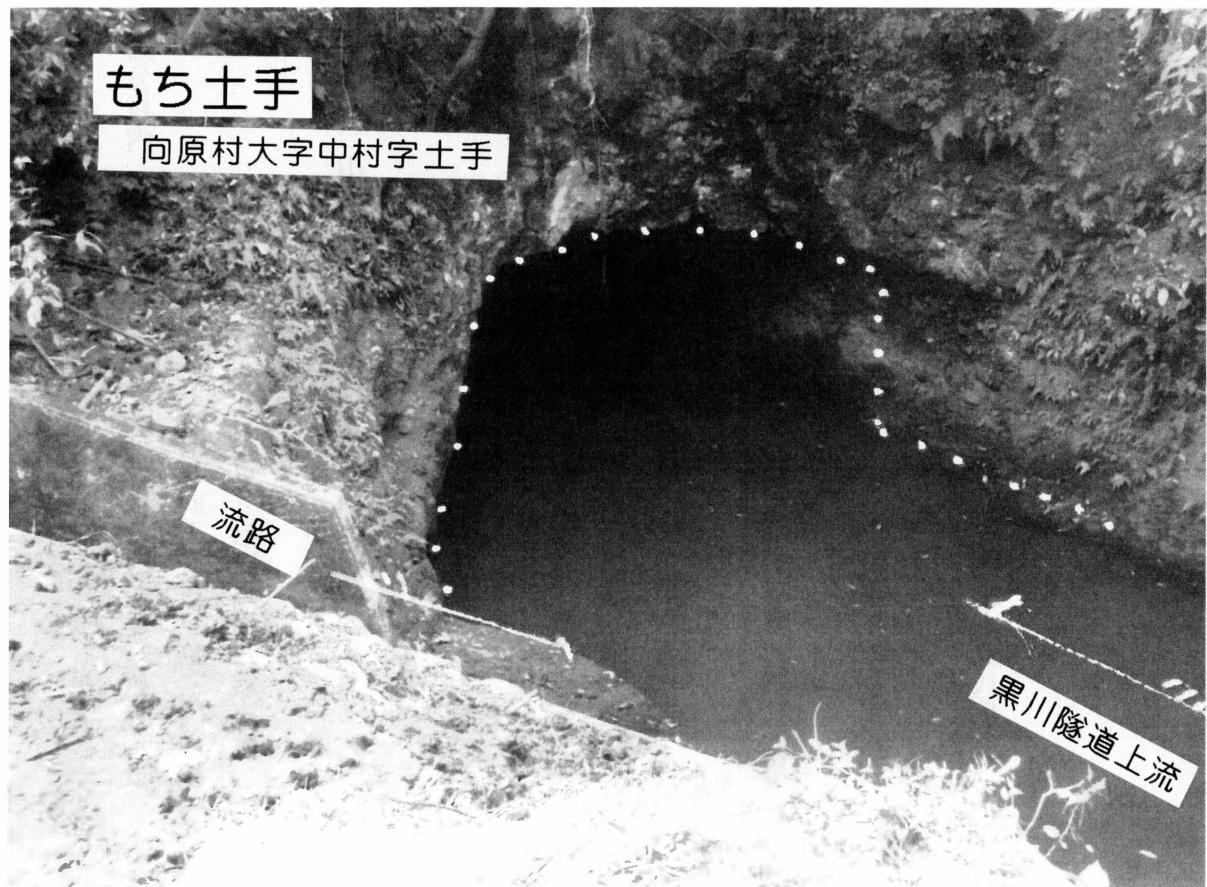
※現在の水利（灌漑）面積は204町歩です。

明治式拾四年旧式月拾弌日

以上

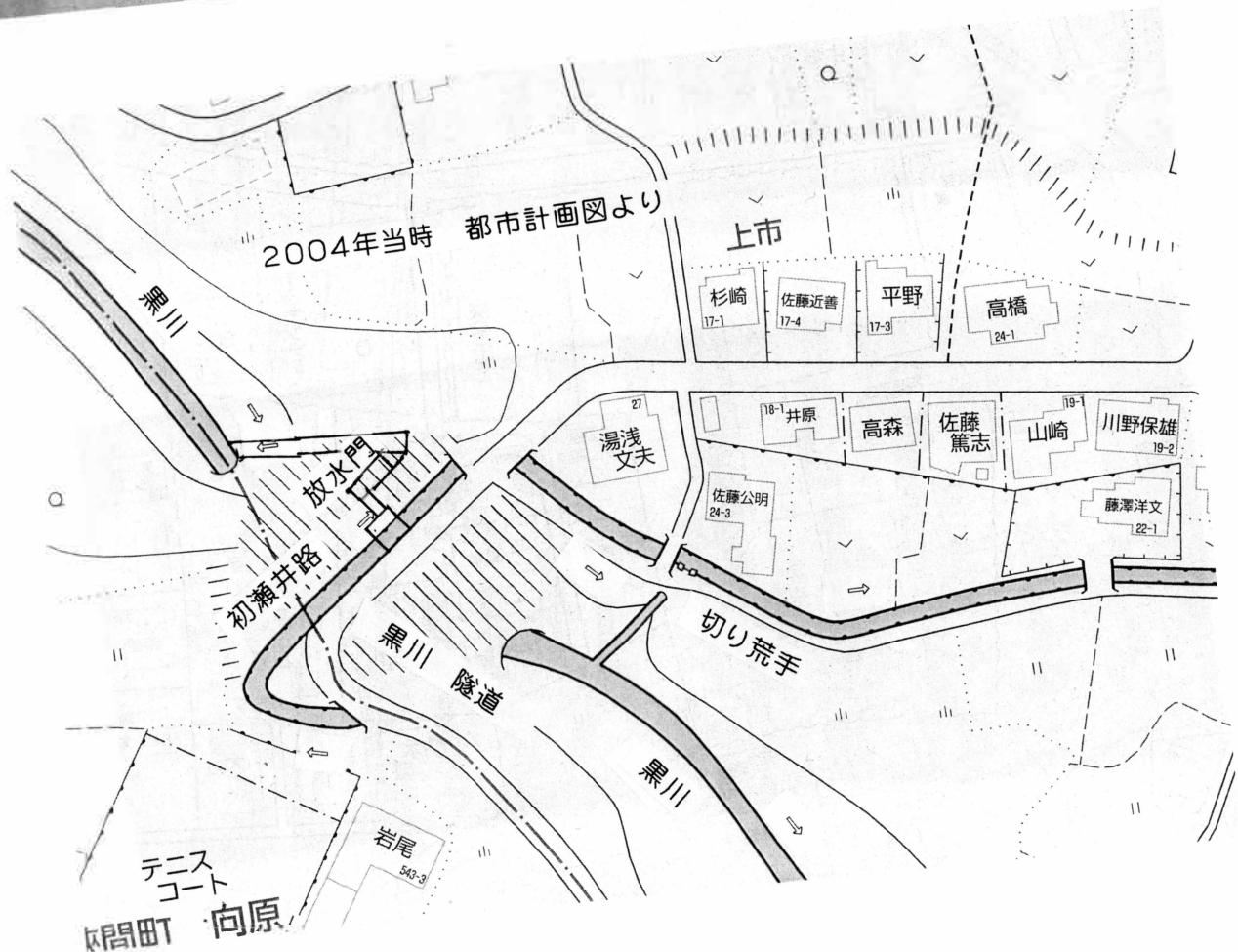
「初瀬井路普通水利組合設立」、初代管理者は郡長滝吉弘であり、滝廉太郎の父である。（廉太郎十一歳）

内訳
挟間村 百三十九町九反五畝二分
賀来村 百九十七町三畝五分
由布川村 三拾弌町五反三畝
石城川村 九町二反七畝
荏隈村 百五拾町八反三畝二分
豊府村 百六拾三町七反拾四畝七分
大分村 百五拾三町九反九畝拾七分
西大分村 百拾六町六反五畝十一分
毎年の収穫高 二万四千百二十七石米
六百七十石麦



初瀬井路測量図

筆料は岩絵ノ具使用である。
観音淵から生石名まで千五百分の一にて作図
祖父
安部権平も関与したのであろう測量図



三十一	三一五
三十二	三二五
三十三	三三五
三十四	三四五
三十五	三五五
三十六	三六六
三十七	三七七
三十八	三八七
三十九	三九七
四十	四〇七
四十一	四一七
四十二	四二七
四十三	四三七
四十四	四四七
四十五	四五七
四十六	四六七
四十七	四七七
四十八	四八七
四十九	四九七
五十	五〇七
五十一	五一七
五十二	五二七
五十三	五三七
五十四	五四七
五十五	五五七
五十六	五六七
五十七	五七七
五十八	五八七
五十九	五九七
六十	六〇七
六十一	六一七
六十二	六二七
六十三	六三七
六十四	六四七
六十五	六五七
六十六	六六七
六十七	六七七
六十八	六八七
六十九	六九七
七十	七〇七
七十一	七一七
七十二	七二七
七十三	七三七
七十四	七四七
七十五	七五七
七十六	七六七
七十七	七七七
七十八	七八七
七十九	七九七
八十	八〇七
八十一	八一七
八十二	八二七
八十三	八三七
八十四	八四七
八十五	八五七
八十六	八六七
八十七	八七七
八十八	八八七
八十九	八九七
九十	九〇七
九十一	九一七
九十二	九二七
九十三	九三七
九十四	九四七
九十五	九五七
九十六	九六七
九十七	九七七
九十八	九八七
九十九	九九七
一百	一〇七

一九九	一〇〇
牛法	牛法
虎令	虎令
威令	威令
三合	三合
四令	四令
五令	五令
三外	三外
四外	四外
五外	五外

唐牛	四四寸	九分
武象	四二寸	七分
威象	四六寸	二分七厘三毫
三外	四三寸	六分七厘七毫
四外	四五寸	八分八厘七毫
五外	四七寸	十分九厘八毫
六外	四八寸	九分四厘四毫
七外	四九寸	八分九厘六毫
八外	四九寸	八分八厘八毫
九外	四九寸	九分八厘四毫
唐牛	四九寸	九分八厘三毫

19. あとがき

慶安三年に「初瀬川」、諸氏の夫員数、九三二〇二人となり清水与兵衛は日根野公に答えたと言う事が、昭和三十年、大分市史、及び昭和四十一年、初瀬井路史に、書いています。通水より五十七年後に書かれた、大石家文書「府内藩井手書上」宝永三年、(一七〇七)工事に関して、精密な文書がある。長さ、人数、飯米、作業取、家中(藩お抱え分)等の記録です。

大分市史(昭和三十年)、初瀬井路史(昭和四十一年)、九三二〇二人は、一を三と間違つて解釈したものと思われる。

よつて次に述べる。

初瀬川(櫟木井出)

大石家文書府内藩井手書上、宝永三年七月

本 間数 八二六八間 井手口より東院川迄(八二六八間)

人數 七九八二三人

此飯米 五九八石七斗一升六合

志た 一〇ヶ村分

間数 一〇六七七間

人數 一八八六人

此飯米 一四石一斗四升五合

作料取、大工、かじ、おが(大鋸) 樵のこと

人數 二八一〇人

作料取代	銀二貫四五五匁八分
鉄、釘、かすがい、漆喰、炭、檳皮、代銀	二貫七八二
匁七分 ベ銀	五貫二三八匁五分

家中(藩お抱え分)は

御手大工、おが、志やくわん、足軽、御小人
人數六七八三人

合 人数 九一三〇二人

此 飯米 八四二石三斗三升三合

合

初瀬井手下

反数 一五七町二反一畝 内

吉田 五〇町九反六畝二七歩 天水、井手下成

同 四〇町一畝一五歩

畠成田 六三町二反二畝二四歩

右より田上井手下縣り

新起田 二町九反三畝

従つてこの文書より読み下して見た時、本とは、井手下本線のことであり、水路工事本体であろう。志た、とは、一〇ヶ村の本線より井樋(いび)を作り土手より下の用水路と管理道田圃の造成いわば圃場整備も行なつていたことが伺える。

数量の集計

合人數 合計 九一三〇二人

合此飯米合計 六一二石八斗六升一合

領民施工部は

領民人数 本十志た 計八一七〇九人

領民飯米 " 計六一二石八斗六升一合

*計算式 六一二八六一石／八一七〇九人＝○・○〇七五〇

(七合五勺)

故に、領民は無給であり、一日玄米の支給は七合五勺であった。

長宝水、永宝水等の支給飯米は七合と言われていたが七・一%多く支給していることは、作業の督励する為のものであろう。作業取とあるは技術集団の事であり鍛冶、タガネや石ノミを造る人達 大工 櫟

計算式 五四八五七石／二八一〇人＝○・〇一九五＝約二升／人
代銀二貫四五匁五分

*銀一匁を江戸時代そば一杯五〇〇円とした時三、三〇〇円／匁
二・四五八×三三〇〇＝八一一・四〇〇〇円

八一一・四〇〇〇円／二八一〇人＝二八六七円

以上の事から領民よりも玄米は二・六七倍支給、日当は無給に対して二八六七円、領民の内から技術のある人は多く採用したのではないだろうかと思う。

着工一月十三日 完成二月二十八日 工事日数四十六日間であ

り、工事期間中大事故に依る犠牲者の記録口伝もない様であるので誠に幸運な工事であった。

初瀬井手まとめ

本井路 間数 八二六八間 一五、〇四八m

下(枝) 井路 間数 一〇六七七間 一九、四三二m

総人数 九一三〇二人

飯米 八四二石三斗一升五合

銀 五貫二三八匁五分

明治二十三年 九六五町八畝五歩 (一・〇〇とした時の指標)

昭和三十年八六〇町 ○・八九

" 四十一年六三〇町 ○・六五

" 五十年四八〇町 ○・五〇

平成二十九年二二五町 ○・二三

現在の用水路 (第三章用水路)

十条 本土地改良区の用水路は、

幹線 (由布市庄内町、九

電桺木ダム取入口より、

大分市生石まで) と補水
線 (由布市挾間町向原よ
り大分市東院まで) をす
る。

終り

位 置	開渠	慶安・元禄	隧道	慶安・元禄	計	慶安・元禄計	付 記	年度
幹 線	櫟木ダム より東院 まで	13,590		2,340		15,930	15,048 一、二、三方張 コンクリート	1,650 _____
	宮苑取入 口より末 流まで	11,530		1,750	-	13,280	隧道巻立コン クリート	1,583
補 水 線	渦河原取 入口より 東院まで	4,430	7,109	2,720	928	7,150	8,035	1,694

(単位は m)